

ちひろ美術館・東京 No.214

安曇野ちひろ美術館 No.107

美術館だより

2022.2.21



ちひろが描いた映画と音楽

●2022年3月1日(火)～5月29日(日)

ちひろは若いころから映画と音楽に親しんでいました。本展ではちひろが好きだった映画や音楽とともに1960年代後半の絵本表現との関わりを読み解きます。

映画と音楽への憧れ

大正生まれのちひろの家には、当時珍しかったラジオや蓄音機、オルガンがありました。娘時代は映画「オーケストラの少女」の女優ディアナ・ダービンに憧れ、主人公が着ていた洋服を真似て、ワンピースを手づくりしています。都会的な家庭で育ったちひろには、外国の映画や音楽に親しむ素地がつくられていました。

1946年5月、絵で身を立てることを決意したちひろは、疎開先から上京し、戦争の名残が色濃く残る神田で生活を始めます。叔母の家の屋根裏に間借りし、芸術学校に通いながら、新聞記者の仕事をして暮らしていました。アメリカの映画俳優・歌手でタップダンスの名手でもあるフレッド・アステアの大ファンだったちひろは、このころ自宅で毎日のように彼のレコードを聞いていました。忙しい生活のなかで心が沈むとき、アステアはちひろの心の支えになっていました。



図1 ラジオ工場 1948年 3月19日

新聞記者として書いた記事のなかで、ちひろはラジオの部品工場でガラス製品を扱う手を「美しい指の踊

り」と表わしています(図1)。「神経の細くゆきとどいたせんさいな、白いきれいな指が、蝶がひらりと身をかわすように」という表現には、華麗に舞い踊るアステアのイメージが垣間見えます。映画がちひろの感性に深く結びついていたことが推察されます。

このほかにも、クラシック音楽やジャズを好み、ロシア民謡を口ずさんでいたというちひろにとって、音楽は常に生活のなかにもありました。映画と音楽への憧れはときを経ても色あせず、ちひろの心に残り続けました。

映画と音楽を絵本にする

やがて子どもの本の世界で活躍するようになったちひろは、1960年代半ばから絵本の仕事を多く手がけ、1960年代後半には、映画や音楽の絵本化に取り組みました。



図2 道で踊るカーレン「あいかくつ」(偕成社)より 1968年

アンデルセン原作の「あいかくつ」は、ちひろが繰り返し描いた物語ですが、1968年に手がけた絵本には映画「赤い靴」(1950)*のバレエのシーンの影響が見られます。丸く広がるスカートはバレエのターンを連想させ、俯瞰でとらえることで一層動きが際立っています(図2)。

ウェーバーのピアノ曲「舞踏への勧誘」を絵本にした『ふたりのぶとうか

主催：ちひろ美術館
協力：アイ・ヴィー・シー、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

い』は、盛り上がる曲調では鮮やかな大輪のバラを描き、細やかなリズムは小花を散らすなど、音楽のメロディーやハーモニーを絵本で表現しました(図3)。



図3 バラのなかで踊るふたり「ふたりのぶとうかい」(講談社)より 1968年

新しい絵本づくり

1968年、絵本でなければできないことを目指し、ちひろは編集者とともにストーリーを中心としない新たな絵本づくりに挑戦します。「雨の日」「留守番」というイメージをことばに頼らず、絵本で表現するにあたり、偶然テレビで見た映画「しのび泣き」(1949)*の雨のシーンにちひろと編集者はヒントを得ます。男女の悲恋を描いたこの映画では、最小限の説明と詩情に富んだ台詞や画面が深い余韻を残します。ちひろは、絵本『あめのひのおるすばん』で留守番の最中に期待と不安が入り混じる少女の心情を、最小限のことばと淡く溶け合う色合いで表現し、絵で展開する絵本をつくりました。

1960年代後半に集中して行われたこれらの試みは、表現の幅を広げ、独自の絵本づくりにつながっていきました。ちひろが描いた映画と音楽の世界をお楽しみください。(高津つぐみ)

ちひろ美術館コレクション

●2022年3月1日(火)～5月29日(日)

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大によって、わたしたちは自由な行動や表現だけでなく、人と会うことまで制限されてきました。行きたいところに行き、歌を歌い、友だちと話をしながら食事をしたり、たくさんの人とともにイベントを楽しむ。それがどんなにしあわせで大切な時間なのかを実感しました。本展では、ちひろ美術館コレクションのなかから、お祭りやパレード、さまざまな楽器を奏でるコンサートなど、世界の絵本画家たちが描いた高揚感あふれる作品を展示し、集うことの尊さ、歌い踊ることのよろこびを見つめます。

茂田井武の「こんやはよみや」(図1)は、とうもろこしやあめ、おめんやふうせんの店がならぶ神社の宵宮を描いた作品です。お御輿がかついでり屋台に集まるのはいろいろな動物たち。にぎやかなおはやしや動物たちの会話も聞こえてくるようで、お祭りの熱気が感じられます。

わたしたちは集い、歌い、踊る



図1 茂田井武(日本)「こんやはよみや」『ケンダーブック』1956年9月号より



図2 荒井良二(日本)「コックリとジョジョニ」(ほるぶ出版)より 1991年

荒井良二の『コックリとジョジョニ』(図2)は歌とアコーディオンが得意な男の子とダンスが得意な女の子の出会いを描いた絵本です。本展では、音楽と踊りにあふれたこの絵本の原画を全場面展示するとともに、絵本から飛び出したようなインスタレーションも展示します。



図3 ジョン・バーニンガム(イギリス)『バラライカねずみのトラプロフ』(ほるぶ出版)より 1964年

ジョン・バーニンガムの『バラライカねずみのトラプロフ』よりロシアの弦楽器バラライカに魅せられたねずみがコンサートに出演する夢を見る場面です(図3)。困難を乗り越えて夢にむかうねずみの姿が爽快です。(矢野ゆう子)

幼い日に見た夢 いわさきちひろ展

●2022年3月12日(土)～6月19日(日)



図1 つば広帽子の少女
1970年頃

幼い日心にうけた感動が、その人の成長につれてふくよかにより美しく成長し、心の糧になっていく。1968年

このことばの通り、いわさきちひろは、自分自身の幼いころの憧れや夢、そしてやわらかな心で受け止めた情感を絵画や絵本の表現として昇華させています。本展では、ちひろの幼少期に焦点をあて、子ども時代に接した童画とそこから影響を受けた作品、そして幼い日の思い出をテーマに描いた絵や絵本を、ちひろのことばとともに紹介します。

童画への憧れ

ちひろは、大正デモクラシーの気運が高まるなか、東京・山の手で恵まれた少女時代を過ごしました。ちひろが生まれた1918年に創刊した「赤い鳥」をはじめ、大正から昭和のはじめにかけて、子どものための芸術として童話や童謡を掲

載する雑誌が次々と創刊されました。子どものための絵画、「童画」が大きく花開く舞台となったのは絵雑誌「コドモノクニ」でした。そこには、見開きのページで岡本帰一や武井武雄、初山滋といった画家たちの個性豊かな絵が掲載されました(図2)。美しい色彩で描かれた洒落な装いの子どもや、モダンなくらし、空想の世界は、ちひろの幼心に鮮烈な印象を残しました。後年、ちひろは「コドモノクニ」を見たときの感動を「見ることや考えることがたくさんあって、夢のようないい気持ちになった」と語っています。



図2 岡本帰一
サンリンジャ
1926年



図3 「にじがでた」1957年

第二次世界大戦後、ちひろは童画家として、憧れていた武井や初山と肩をならべ、同じ絵雑誌に絵を描くようになります(図3)。「私の心のなかには、幼い日

主催：ちひろ美術館
後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(公社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

見た絵本の絵がまだいきつづけている。」このことばには、子どもの夢を描く画家としてのちひろの誇りが感じられます。

幼い日に見た夢 平和への願い

ちひろが子どもの本を舞台に活躍の場を広げた1960年代、日本は目覚ましい経済成長を遂げました。一方で激化の一途をたどるベトナム戦争の報道に接し、ちひろは自身が体験した戦争に重ね心を痛めます。戦争の只中で青春を過ごしたちひろにとって、平和だった子ども時代の思い出は何にもまして尊く感じられたことでしょうか。戦争で子ども時代を奪われた子どもたちに心を寄せ、広島原爆で被爆した子どもたちの手記を描いた絵本『わたしがちいさかったときに』(図4)に取り組みます。



図4 防空すきんにくるまるあかちゃん「わたしがちいさかったときに」(童心社)より 1967年

このほか、本展では、ちひろ自身の子ども時代の感性がみずみずしく映し出された至光社の絵本シリーズをビエゾグラフで紹介しします。(原島 恵)

エリック・カールとアメリカの絵本画家たち

●2022年3月12日(土)～6月19日(日)

昨年5月に亡くなったエリック・カールは、ちひろ美術館コレクションの第1号となる「おんどり」を寄贈してくださいました(美術館だより前号参照)。本展では、当館のコレクション作品を中心に、彼の絵本への取り組みを紹介します。展示後半では、アメリカで最も古い絵本賞である、コールデコット賞を受賞した画家たちの作品を、当館のコレクションから紹介します。

エリック・カールの人生と絵本

1929年にドイツ人の移民の両親のもと、ニューヨーク州で生まれたカールは、アメリカの小学校時代について、「太陽の光にあふれた部屋、大きな紙、色とりどりの絵の具、大きな筆を鮮やかに覚えている」と記しています。先生は彼の絵の才能を認め、母親にそれを育てるように伝えたといいます。1935年にはドイツへ渡りますが、その学校でであったのは、「狭い部屋と固い鉛筆、そして間違いをしないようにという厳しい指導」でした。その後、ドイツの美大へと進学しますが、アメリカでの子ども時代に育まれた感性は、彼に少なからぬ影響を与えたと想像されます。

カールの絵本には、グラフィックデザイナーならではの斬新な視点と、子どもたちが困難を乗り越えて、楽しく学べるようにという教育的視点が共存しています。例えば、彼の最初の創作絵本『1, 2, 3, どうぶつえんへ』は、文字の無い絵本



図1 Eric Carle, Illustration for 1, 2, 3 to the Zoo.*で、列車の貨物に乗る動物たちを通して、数や数字に親しめる工夫がされています。この場面にはキリン3頭のほか、各場面に隠れている小さなネズミを見つける意外な驚きがあります。ポローニャ国際児童図書展で、グラフィック賞を受賞したこの絵本は、鮮やかな色彩、動物への関心、遊びのある本づくりなど、カールのその後の絵本に見られる魅力が既にすべて含まれています(図1)。

1996年の『できるかな?あたまからつまさきまで』(偕成社)は、動物が子ど

主催：ちひろ美術館
協力：The Eric Carle Museum of Picture Book Art, Amherst, Massachusetts, 今村正樹・純子



図2 『できるかな?あたまからつまさきまで』習作

もにさまざまな体の動きを「できるかな?」と呼びかける絵本です。カールは、絵は得意でも運動が苦手な子どもだったそうです。そんな彼が年をとって健康のために、動物の名前を取り入れた体操をすることになり、そこからこの絵本のアイデアが生まれたといいます(図2)。

絵本の絵を美術として

日本で、当館を含めいくつかの絵本美術館を見たことにより、エリックとバーバラ・カールは2002年にアメリカ・マサチューセッツに、エリック・カール絵本美術館を創設しました。

この絵本美術館は、絵本のための絵を美術として世界中の人がとらえることを、使命のひとつに掲げています。美術への入口としての絵本、そして子どもも楽しめる美術館という考えは、ちひろ美術館と共通するものです。本展には、カール美術館の協力のもと、同館所蔵作品の複製画も展示します。(松方路子)

松川中学生ボランティア20年のあゆみ

「トットちゃん広場5周年 みんなの夢プロジェクト」活動報告

安曇野ちひろ美術館の所在地、松川村にひとつだけある中学校の有志が、夏休み期間を利用して、美術館を舞台に活動を行う松川中学生ボランティアは、2021年の夏に、20年目を迎えました。

ボランティア活動がスタートしたのは、2002年。当館が開館して5年目のことです。前年の2001年、世界の絵本館のオープニングセレモニーで、ポーランドの絵本画家ユゼフ・ヴィルコンの音を奏でる立体作品「歌うドラゴン」を松川中学校の吹奏楽部が演奏してくれたことが、交流が深まるきっかけとなりました。

「地元の中学生に美術館に関わってもらいたい」と、松川村立松川中学校に働きかけ、当館の教育普及活動の一環として、2002年から中学生ボランティアの活動が始まりました。それからの20年、中学生は展示会の展示解説や作品の実演、ワークショップ、美術館ガイドツアー、絵本の読み聞かせや朗読会など、毎夏、さまざまな活動に挑戦してきました。

ひとりひとりのお客さまに対して、心を込めて誠実に向き合う中学生の姿に、来館者からは「楽しかったよ」「ありがとう」の声が。そのことばと笑顔の励みに、中学生たちは、一生懸命に取り組み、自己成長してきました。この20年の間で、延べ3033人の中学生ボランティアが来館者のみなさまと交流し、さわやかな感動と笑顔の輪を広げてくれています。

●みんなの夢プロジェクト

新型コロナウイルスの感染拡大により、やむなく中止となった昨年度を経て、今年度は、松川中学校の全校生徒240人とともに「みんなの夢プロジェクト」に取り組みました。

「トットちゃん広場5周年『窓ぎわのトットちゃん』展」会期中の6月5日～9月5日、当館の多目的ギャラリーと安曇野ちひろ公園のトットちゃん広場・体験交流館を会場に、子どもたちと来館者のそれぞれの夢を寄せ書きした“にじみのオーナメント”を展示しました。

“にじみのオーナメント”は、松川中学生ボランティアを中心に、村内の小学校、保育園のほか、村内外の子どもたちやボランティア、総勢1480人がつくりました。

松川中学校の1、2年生を対象に、当館のスタッフが出前授業を行い、ちひろの水彩技法の“にじみ”を体験してもらいました。そのにじみ絵を用いて全校生徒が約3000個のオーナメントをつくり、将来の自分の姿を思い描きながら、そのひとつひとつに夢を記しました。



会場を訪れた約5000人の来館者がオーナメントに記された子どもたちひとりひとりの夢を読み、子どもたちへの応援メッセージやご自身の夢を寄せ書きしてください、夢の世界が広がっていききました。

また中学生がこのプロジェクトを説明する動画を制作し、会場で上映するとともに、「おうちで楽しむみんなの夢プロジェクト」としてSNSでも配信し、全国のみなさまに参加を呼びかけました。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、中学生と来館者が直接交流することは叶いませんでしたが、この夏は、中学生たちの元気な声が美術館に響きわたることを願っています。

中学生ボランティアは、学校や家庭の協力や理解があって、実現している活動です。地域のみなさまに支えられて当館はこの春、開館25周年を迎えます。

この先も美術館を未来につなげていけるよう、地域に根付き、愛される美術館を目指して、松川村の子どもたちとともに、文化を育む活動を続けていきます。

（船本裕子）

「ちひろ美術館コレクション 絵本で世界を旅しよう」関連イベント オンラインアーティストトーク

2021年10月24日（日） 絵本画家ボロルマー・バーサンスレンさんと旅するモンゴル

モンゴルの遊牧民の暮らしを描いた絵本『はくのうちはゲル』（石風社）の作者である、モンゴル出身の絵本画家ボロルマー・バーサンスレンさんをゲストに、オンラインでトークイベントを開催。21名の方にご参加いただきました。

まずは『はくのうちはゲル』の読み聞かせからスタート。ボロルマーさんの穏やかな声とモンゴル語のやさしい響きにつられ、ページを追うごとに絵本のなかのモンゴルの地へと誘われていきます。

続いて、絵本の印象的な場面を画面に映し出し、じっくりと鑑賞しながら、参加者はチャット欄にモンゴルや絵本についてのさまざまな質問を書き込みました。



『はくのうちはゲル』（石風社）より 2006年

「一広大な草原を移動中、迷子になることは？」「遊牧民は星の動きや山の位置で道がわかる。でも郵便屋さんは大変です。」

「ボロルマーさんがゲルに住んだことは？」「子どものころ、夏になると父の両親が暮らしていた草原のゲルに住んだ。描くのは全部自分が経験したこと、おばあちゃんたちから話を聞いたことです。」

ご自身のルーツや絵本づくりについても、現地で撮影した写真を交えてお話してくださいました。「母が妹と私に芸術に触れる場を与えてくれた。9歳の時には来日する機会があり、人や文化に触れ、日本の絵本にも影響を受けました。」「何も考えずに描くとからっぽになって、いのちを吹き込むことができない。役づくりと同じように、人物の性格や気持ち、自分と似ているところは……と考えます。それは、大切だけど苦しい時間でもあります。」

「遊牧生活をする人々は段々と減

り、草原に親族が住んでいない人も増えてきた。人と自然とのつながりやモンゴルの伝統を、絵本を通して子どもたちに伝えていきたい。」



民族衣装を着て登場してくださったボロルマーさん（日本のご自宅より）

「ご自身のことばに、ボロルマーさんの絵本の根底には、故郷モンゴルへの深い愛情と遊牧民を見つめるあたたかいまなざしがあるのだと感じました。」

90分の短い旅でしたが、参加者からは「モンゴルに旅行して帰ってきたような気持ちです。」「ボロルマーさんのお話を聞いてモンゴルを身近に感じられた。」という声が寄せられました。依然として自由な移動が難しい状況にありますが、今後もオンライン配信を活用し、アーティストと参加者の交流を深める機会を設けていきたいと思ひます。（畔柳彩世）

「生誕111年 赤羽末吉展 日本美術へのとびら」関連イベント

2021年8月22日(日) 赤羽茂乃×赤羽研三 夫婦対談「父・赤羽末吉を語る」

仏文学研究者で赤羽末吉の三男・研三さんと、赤羽研究の第一人者で、昨春、評伝『絵本画家赤羽末吉』（福音館書店）を上梓した茂乃さんが、初の夫婦対談で素顔の赤羽末吉について語りあいました。（中平洋子）

研三：父の没後、旧満州（中国東北部）時代や絵本画家になる以前も含めた膨大な資料を改めて眺めたときに、父の画風の変遷とそれぞれの時代の記憶が、自分でも驚くほど鮮やかによみがえりました。ぜひ整理したいと思いつつ、自分の研究との時間の兼ね合いをどうしたものかと思っていたところ、茂乃が大いに研究して本にまとめてくれた。うれしくて、感謝してもきれません。

茂乃：原稿チェックや校正を手伝ってくれてありがたかったけど、細かい点で意見が違って、夫婦喧嘩も多かった（笑）。さて研ちゃんが生まれたのは月島、旧満州から引き上げて2年目ね。

研三：月島のことは記憶にないけど2歳のときに、府中の都営住宅へ越してからは覚えている。一番広い六畳の間が父の仕事場で、机の上のものさえ触らなければ、自由にさせてくれた。弟と相撲を取

って本棚の埴輪を壊したときと、喧嘩で弟の頭を火鉢にぶつけたときだけ怒られた記憶がある。家ではダイヤモンドゲームやトランプなどでよく遊び、映画館にもよく連れて行ってもらいました。父が広げてくれた縁側が近所の子どものたまり場になったり、庭に植えた柿、栗、イチジクを家族で楽しく収穫したのもよく覚えている。

茂乃：よき子ども時代ね。自分も庭を愛していたけど、「花々は子どもの心になにか作用する」とよくいっていたように、子どもたちへの配慮でもあったのね。

研三：理系を目指していた大学受験の間際、年末になって「文系に変えたい」と相談したときも、若いころに同人誌をやっていた父は喜んで賛成してくれたな。

茂乃：子どもを信じて、意見を尊重してくれたのね。結婚も、信頼する息子が気に入った女性ならよい、という感じで。

研三：父と絵について話し合ったことはほとんどないけど、一度だけ『かさじぞう』の一場面(右図)の、明け方の光と影、おじいさんの構図がとてもよいといったときに、すごく喜んでくれた。「実は描き直したいのだが、描いた当時の気持ちになれず断念したんだ」ともいっていた。



『かさじぞう』（福音館書店）1961年

父の寡黙さとやさしさ、そして雪国の雰囲気がよくでていて大好きな一冊です。

茂乃：私も『かさじぞう』が一番父らしいと思う。お地藏様から贈り物ももらっても、日々傘を売りに行くおじいさんの誠実さが、絵本に誠実に取り組んだ父の生き方と重なります。

研三：肝硬変で体調が悪くなったころ「もう描くのを辞めようと思う」といわれ、そんなに悪いのかと衝撃を受けました。

茂乃：体調は悪かったけど、晩年の『ひかりの素足』の原画の、雪の美しさに父の力を強く感じます。膨大な遺品から興味深い資料が次々と出てくるので、探偵になった気分です。ふたりで楽しく調査できました。大学で専攻した人類学が、ついに意味のあるものに（笑）。父のおかげで、人生の巡り合わせを感じています。

「生誕111年 赤羽末吉展 日本美術へのとびら」関連イベント

2021年8月23日(月) 赤羽茂乃×斎藤惇夫 対談「赤羽末吉 よもやま話」

児童文学作家で福音館書店の元編集者でもある斎藤惇夫さんと、赤羽茂乃さんによる対談を、オンラインで開催しました。一部を紹介します。（上島史子）

斎藤：1960～70年代は、日本の絵本の黄金時代だったといわれていますね。私は1964年に福音館書店に入ったのですが、よく赤羽さんに四谷あたりの飲み屋に連れて行かれました。そこには瀬川康男と梶山俊夫、堀内誠一がいて、3人は赤羽さんにとっては20歳以上年の離れた弟分。泰然自若とお酒を飲んでいる赤羽さんの周りで、血気盛んな若人たちがお酒を飲みながら、喧嘩譚々、先輩に食ってかかって挑戦していたという感じでしたね。3人はお正月になると瀬田貞二さんのお宅に集まるんです。瀬田さんは絵を描く方ではないので、安心して絵本を批評していただいたりしていた。かたや鎌倉の大老・赤羽先生。絵描きである赤羽さんは絵に対して直接的におっしゃいましたから、議論は一気にぱつと燃え上がりました。このおふたりが全体を見ながら、次の世代に対して、表現しなければい

けないことを伝え続けていたんじゃないかなと、今になってしみじみと思います。**茂乃**：相手を認め合っているからこそいい合える。よい関係ですよ。

斎藤：みんなが尊敬していたのが、フェリックス・ホフマンだったんですね。赤羽さんも大好きだった。ホフマンさんが私たちに教えてくれたことは、絵本の絵は、子どもはもちろん大人の鑑賞にも耐えるものでなくてはならない、絵が物語を語っていなくてはならない、そして絵にはユーモアがなくてはならない、ということだったんですね。絵が物語を語るということ、ずっと守って描いていたのは、赤羽先生だったと思うのです。絵本という表現形式が、自分の表現したいものとぴったりあったんだということも、赤羽さんはおっしゃっていた。

茂乃：戦中戦後のかなり早いうちから、自分を生かす道はこれが一番なんだということに気がついていました。赤羽末吉って、タブローはほとんど描いていなくて、本当に「絵本」なんですよ。

斎藤：それと、「子ども」だったんでしょね。トロントの児童図書館に行った

ときに、「私たちは『ナルニア国物語』を書架に並べるかどうかで、6年かかった」といわれたんです。思わずWhy?とお聞きしたら、「だって、子どもたちのための本ですから」と。そのときに、日本の図書館や出版の遅れも、深く教えられた気がしました。帰って来てすぐに、赤羽さんに報告したんです。赤羽さんは真面目な顔で、そのとき描いていた『つるによぼう』が子どもの手に渡るまでには、7年半はかかるだろうといい、「いいかい、相手は子どもなんだぜ」っておっしゃった。

赤羽さんは国際アンデルセン賞作家賞の授賞式で「私は50歳から絵本を描いてきたけれども、90歳になったら本当に子どもたちの絵本が描けるはずですよ」とお話しされて、喝采を受けたんですね。舞台のそでに戻ってきたら、「ちょっとふかせすぎたよな」って。赤羽さんという方は生真面目なところとユーモアのあるところと、それが全部交じり合っていて、実際に楽しい絵本をつくった。生涯を通じて絵本に、そして子どもに向かっていらした方だったと思います。

ちひろ美術館・東京 2022年展示予定

●6月25日(土)～10月2日(日)

○ちひろ・花に映るもの

花と子どもを描いた作品の表現の変遷を追いつつ、そこに込められたちひろの思いを探ります。



いわさきちひろ
チューリップのなかのあかちゃん 1971年

○ちひろ美術館コレクション

江戸からいまへ 日本の絵本展

江戸時代を起点に、現代までの絵本の歩みと広がり、ちひろ美術館コレクションをもとに紹介します。伝統的な絵巻から、江戸期に盛んに出版された草双紙、明治期以後広がった子どものための絵雑誌、戦時中の絵本、そして今も読み継がれる絵本——。およそ400年の間に日本の絵本がどのように変化し、発展したかを見ていきます。



西村繁男 「かたことがたこと」(垂心社)より 1999年

●10月8日(土)～2023年1月15日(日)

○くらし、えがく。ちひろのアトリエ

22年を過ごした練馬の自宅をはじめ、ちひろが画家として出発した神田の下宿や、1966年に信州北端の地に建てた黒姫山荘を紹介し、そこでちひろがどのように暮らし、絵を描いたのかを、作品や彼女自身のことば、資料などを通して見ていきます。



いわさきちひろ
アトリエの自画像
「わたしのえほん」
(新日本出版社)
より 1968年

安曇野ちひろ美術館 2022年展示予定

●6月4日(土)～9月4日(日)

○ちひろ 雨の日 晴れの日



いわさきちひろ
小犬と雨の日の子どもたち 1967年

もっとも身近な自然である天気のみならず、さまざまな表情をとらえた、ちひろの作品の数々をお楽しみください。

○ちひろ美術館コレクション

絵本から飛び出せ！動物たち

世界の絵本画家が描いた動物たちを、生息環境ごとに6つのテーマでご紹介します。



あべ弘士 「ライオンのながいいちにち」
(佼成出版社)より 2003年頃

●9月10日(土)～11月29日(火)

○ちひろからの定期便

「子どものしあわせ」と「こどものせかい」



いわさきちひろ
木の葉の精 1973年

ちひろが手がけた月刊誌「子どものしあわせ」と「こどものせかい」の仕事、印刷技術の発展と画風の変遷もあわせて紹介します。

○谷内こうた展 風のゆくえ

谷内こうた(1947-2019)は、絵本『なつのあさ』(1970)で日本人として初めてポロニャ国際児童図書展グラフィック賞を受賞し、早くから国内外で注目を集めました。本展では、絵本原画とともに、「週刊新潮」などの雑誌の表紙絵や



谷内こうた「なつのあさ」(至光社)より 1969年

終生手がけた油彩画も展示し、谷内こうたの画業を紹介します。

○ちひろ美術館コレクション

絵本画家の絵の具箱

世界の絵本画家の作品を「画材」に焦点をあてて紹介します。



キアラ・ラバッチーニ
「ねえ こっちむいて!」(小学館)より 1998年

窓

日本の「子どもの貧困」

竹迫祐子(公財)いわさきちひろ記念事業団

現在、日本の18歳未満の子どもの貧困率は13.5%。7人に1人の子ども*1が、貧困ライン*2を下回っている「相対的貧困」状態にあると言われます。

なかでも深刻なのは、ひとり親家庭、とりわけシングルマザーの家庭ですが、コロナ禍はそれに一層の拍車を掛けました。休校などで給食を食べる機会を失い、オンライン授業では受信環境が整えられず、学ぶ機会を失った子どもも少なくありません。公的な支援が切実に求められています。

一方、民間では、貧困問題に取り組む36団体からなる「新型コロナ災害緊急アクション」がいち早く動いたのをはじめ、一昨年来さまざまな支援の取り組みがなされてきました。そんな活動のひと

つ、岡山県の「北長瀬コミュニティフリッジ」の活動は、目を引きました。同団体は、「困ったときはお互いさま」という理念のもと、地域で「食料品・日用品の支援を必要とされる方が、時間や人目を気にせず、24時間都合がよい時に提供される食料品・日用品を取りに行ける仕組み」をつくっています。支援を受けられるのは、原則として児童扶養手当や就学援助などを受給されている人。登録しておく、必要なものの入荷の知らせが届きます。取りに行くのは、駅前のパブリックスペースの一角にある立体駐車場に直結している倉庫で、人目を気にせず利用できるよう配慮されています。支援をする側も、個人や企業、ともに登録制。例えば個人なら、お歳暮やお中元でもら

った缶詰など、食べきれないものを提供することもできれば、インターネットで購入して寄付する形も取れます。地元の農家や企業の協力も多く、生協やパン屋さん、養蜂屋さんなどからの物資提供。さらには、美容師さんによるチャリティカットや運送会社が無料で支援物資を運ぶ動きも出て来て、まさに町ぐるみであたたかい支援の環が広がっています。

ちひろ美術館は今年、制作会社に働きかけ、一部の新しいちひろグッズを寄付付き商品として制作してもらい、売り上げの一部を各社から「セーブ・ザ・チルドレン」や「NPO法人むすびえ」などに寄付し、子ども食堂などの活動に役立ててもらおう取り組みを行います。「子どもは全部が未来」*3です。

東京
美術館
日記

11月13日(土) ☀️
2020年10月以来、約1年ぶりの「絵本のじかん」。図書室に椅子をゆったりと配置し、換気にも気を配りながらの再開となった。テーマ「あき」にちなんだ絵本や、わらべうたを20名の参加者とともに楽しんだ。

11月20日(土) ☀️
西東京市の保谷こもれびホールで、映画「いわさきちひろ～27歳の旅立ち～」の上映会が行われた。10月30日(土)には、関連講座「いわさきちひろの絵と人生」も開催、両方に参加される熱心なファンの方も。200名を超える参加者からは、「絵本画家以外の側面を知り驚いた」「人生を知った今、もう一度絵を見たい」といった感想が聞かれた。「近くにあることを知らなかった。今度行ってみます」との声もあり、近隣の方に、ちひろと当館について知っていた多く機会となったことを実感。

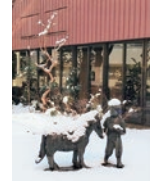
12月9日(木) ☀️のち☀️
支援会員制度の会員証の絵柄投票を、昨年に続いて実施した。15種類の家から、2022年の会員証として選ばれたのは「かごめかごめ」。「子どもたちの遊んでいるようすがいきいきとして気持ちが和みます。」「みんな手を取り合って、乗り切っていきましょうという気持ちも込めて」と、寄せられたメッセージに共感する。

12月15日(水) ☀️
練馬区立石神井東小学校の3年生が来館。「わたしの好きなちひろ

展」のリクエストにも事前に参加した子どもたち。実際の作品を見ながら好きな絵を選び、感想や模写を、熱心にワークシートに書き込んでいた。「どっちにしよう、迷っちゃう」「この絵本、家にあるよ」というおしゃべりや、ちひろのサインについて質問をする子ども。時間いっぱい楽しんでくれて、うれしいひととき。

1月6日(木) ☀️

昼前から降り始めた雪が積もり、館内もいつもより静かに感じられる。中庭の彫刻作品「ポニー」というリトルジョー(作:中野滋)も、夕方には雪化粧。



安曇野
美術館
日記

10月16日(土) ☀️
「ピエゾグラフによるわたしの好きなちひろ展」の両館の展示室をオンラインでつなぎ、リアルタイムでギャラリートークを配信、見どころを紹介した。初めての試みであったが、本イベントの参加募集を開始してすぐに、全国から申し込みが入り、2日間で80名の定員が埋まる。入院中の方や外出ができない参加者から「こういった機会はとてうれしい」と次の開催を望む声も。パンデミックは、デジタル化を前進させ、当館のイベントにも大きな変革をもたらした一面がある。

11月3日(水・祝) ☀️時々☀️
田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』や『さくら』、若いころに力を注いでいた人形劇について、

担当芸員がスライドトークを行う。田畑さんと面識があった方の参加もあり、生前の田畑さんとのエピソードをお話しして下さるといいうれしいサプライズも。

11月19日(金) ☀️
「ベビーカーでおでかけ!ファーストミュージアムデー」を開催。0~2歳とその保護者の10組24名が参加し、あかちゃん絵本のおはなしの会やガイドツアーを楽しんだ。参加者内の交流も生まれ、

「近い月齢のあかちゃんがいて、お互いに刺激になったようだ」「美術館を気兼ねなく過ごすことができてよかった」「親子ともども癒されました」と感想が。

1月10日 ☀️
安曇野ちひろ公園で、小正月の伝統行事「三九郎」が行われた。集

まった正月飾りやだるまとともに5m強のやぐらが燃やされ、約150人の参加者は無病息災や五穀豊穡を願った。やぐらは、昭和30年代に子どもだけでつくっていた形を再現。年男と年女が点火すると、煙と火柱が勢いよく舞い上がり、竹の割れる爆音を響かせながら、瞬く間に燃え尽きた。体験交流館では、繭玉づくりのイベントも開催。野菜や花、動物など色とりどりの繭玉を、焼いて味わった。公園内の畑で栽培した小豆を使ったお汁粉がふるまわれると、笑顔があふれた。



写真: 寺口純平



ひとこと
ふたこと
みこと

東京館 **11月2日(火)**
「感想ノート」はいろいろなところで見かけますが、すべてバックナンバーを残し公開しているところは唯一かも。時代を超えてひとりの作家の作品についての想いを共有できることに感動しました。ちひろさんの絵や来館者からの想いを感じられる場所ですね。あかり

安曇野館 **7月17日(土)**
特別支援学校の教員です。この美術館に来てトモ工学園のことを知り(勉強不足で恥ずかしいですが)、「本当はいい子なんだよ」の先生のことばが胸に響きました。毎日子どもと接していると、「何でまた…」と思ってしまうこともあるのですが、子どもを見る目、教育と

11月23日(火・祝)
「母の日」が特に印象的で、見ているうちに自然と涙が出てきました。私が幼かったころ、こうして母が抱いてくれたことを思い出したからでしょうか。新成人のカードありがとうございます。卓志

12月23日(木)
『戦火のなかの子どもたち』の文

は…とても考えさせられました。明日からもがんばろうと思います。**8月14日(土)**
ちひろさんの絵がかわいらしくて、きもちがポカポカしているような、あたたかいやさしいきもちになりました。この作品を見て、みんなを元気にしたいんだなーと感じています。 ひまり 小5

章を何度も推敲されていた資料の展示が、今日一番心に残りました。最後の「のよ」がないのとあるのとのインパクトの差、すごいです。「あたしたちの一生は ずーっとせんそうのなかだけだった」こんな思いをする子どもは絶対にひとりもつくってはならないと思います。 神戸市 吉川

〈田畑精一展より〉
わたしは、ねずみばあさんのことがこころのこりました。りよかんでおいしいにはいったとき、ねずみばあさんがみえました!!
11月30日(火)
田畑さんの絵を見ていて、本物の子どもを描くという心が伝わってきました。ひきこまれました。



ちひろ美術館(東京・安曇野) イベント予定

各イベントの予約・お問い合わせは、各館へ。ちひろ美術館・東京 TEL.03-3995-0612 安曇野ちひろ美術館 TEL.0261-62-0772
 下記のイベントおよび展覧会の会期は予告なく変更になる可能性があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。 chihiro.jp   

【ちひろ美術館・東京で開催のイベント】

〈エリック・カールとアメリカの絵本画家たち 展示関連イベント〉

●スライドトーク

「ちひろ美術館コレクションのアメリカの絵本画家たち」

○日時：3月27日(日) 14:00~14:30
 ○会場：ちひろ美術館・東京 図書室
 ○講師：松方路子(ちひろ美術館学芸員)
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：15名
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.03-3995-0612にて
 2月28日(月)より受付開始)

展示担当学芸員が、ちひろ美術館コレクションを中心にエリック・カールとアメリカの絵本の魅力について語ります。

●講演会「ちひろ美術館とエリック・カール」

○日時：4月23日(土) 14:00~15:00
 ○会場：ちひろ美術館・東京 図書室
 ○講師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：15名
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、
 TEL.03-3995-0612にて3月23日
 (水)より受付開始)



撮影：島崎信一

エリック・カールと親交を深めた松本猛が、ちひろ美術館に収蔵されているエリック・カール作品や、エリック・カール絵本美術館にまつわるエピソードなどを語ります。

〈幼い日に見た夢 いわさきちひろ展 展示関連イベント〉

●松本猛ギャラリートーク

○日時：4月24日(日) 14:00~
 ○講師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：15名
 ○申し込み：当日受付にて申し込み

いわさきちひろのひとり息子・松本猛によるギャラリートーク。展示作品を見ながら、母・ちひろとの思い出や展示の見どころなどをお話しします。

●ギャラリートーク

第1・第3土曜日14:00~
 展示担当学芸員が開催中の展覧会の見どころなどをお話しします。
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：15名 ○申し込み：当日受付

●絵本のじかん

第2・第4土曜日11:00~
 季節や展示にあわせ、毎回テーマにそった絵本の読み聞かせを行います。
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員15名 ○申し込み：当日受付

〈他館でのピエゾグラフィ展〉

●いわさきちひろピエゾグラフィ展 かわいいものが好き

○日時：3月18日(金)~6月6日(月)
 ○会場：「ちひろの生まれた家」記念館
 〒915-0068 福井県越前市天王町4-14

【安曇野ちひろ美術館で開催のイベント】

〈ちひろが描いた映画と音楽 展示関連イベント〉

●ちひろが愛した映画上映会

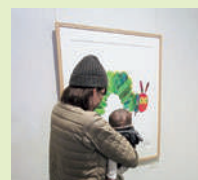
○日時：4月17日(日)
 午前の部11:00~「トップ・ハット」
 午後の部14:00~「しのび泣き」
 ○会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：各回30名
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて)
 「ちひろが描いた映画と音楽」展に関連し、若き日のいわさきちひろが愛した映画上映会を開催します。*DVDによる上映です。

●開館記念日 2022年は開館25周年

○日時：4月19日(火) 10:00~17:00
 安曇野ちひろ美術館は、1997年に信州・松川村に開館しました。今年で25年になります。記念のこの日ご来館いただきました方全員に、ポストカード(非売品)をプレゼントします。

●あかちゃんとおでかけしよう！
ファーストミュージアムデー

○日時：3月5日(土) 10:30~11:30
 ○会場：安曇野ちひろ美術館
 ○対象：0歳から2歳の子どもの保護者
 ○参加費：無料(入館料別)
 ○定員：親子10組
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、
 TEL.0261-62-0772にて)



ファーストミュージアムとは、生まれて初めて訪れる美術館。0歳から2歳のお子さんとともに、あかちゃん絵本のおはなしの会や、開催中の展覧会「ちひろが描いた映画と音楽」のガイドツアーなど、安曇野ちひろ美術館を親子でゆっくり楽しみましょう。

●感謝デー

○松川村民感謝デー 日時：3月6日(日) 10:00~16:00
 ○長野県民感謝デー 日時：3月13日(日) 10:00~16:00
 日ごろの感謝の気持ちを込めて、長野県および松川村にお住まいの方は、入館が無料になります。ご家族やご友人をお誘いあわせのうえ、ぜひご来館下さい。
 ※受付でご住所のわかるものをご提示ください。

●スライドトーク

第4土曜日14:00~ちひろ展/14:30~コレクション展
 学芸員が、開催中の展覧会の見どころを、スライドを用いてわかりやすく解説します。
 ○会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー
 ○参加費：無料(入館料のみ)
 ○定員：20~30名ほど ○申し込み：不要(参加自由)

●絵本のじかん

第2・第4土曜日11:00~11:30
 季節や展示にあわせた絵本の読み聞かせや素話を、親子でお楽しみください。

CONTENTS 〈安曇野ちひろ美術館〉ちひろが描いた映画と音楽/ちひろ美術館コレクション わたしたちは集い、歌い、踊る…② / 〈ちひろ美術館・東京〉幼い日に見た夢 いわさきちひろ展/エリック・カールとアメリカの絵本画家たち…③ / 〈活動報告(安曇野)〉松川中学生ボランティア20年のあゆみ/絵本画家ポロルマー・パーサンスレンさんと旅するモンゴル(オンライン)…④ / 〈活動報告(東京)〉赤羽研三×赤羽茂乃夫婦 対談「父・赤羽末吉を語る」(オンライン) / 赤羽茂乃×斎藤惇夫 対談「赤羽末吉よもやま話」(オンライン)…⑤ / 両館2022年展示予定/窓…⑥ / 東京・安曇野美術館日記/ひとことふたことみこと…⑦

美術館だより 合併号 No.214/107 発行2022年2月21日